

ぶつかり続けたあの頃

ちがみ よういち
千頭 洋一

UIゼンセン同盟・労働条件局・副部長

職業生活のスタートを切った場所は、誰にとっても思い出深いものだと思う。私は20年近く前に総合スーパーに就職し、初任地として東京都下の三鷹の店に就いた。この店はパート・アルバイトを入れても従業員30人程度の小型店だった。初めての仕事に意気軒昂と向かった私は、すぐ壁にぶつかり、空回りを繰り返した。担当部門の業績不振や業務の遅れに苛立ち、落ち込み、ふさぎこむ日々だった。そして、ささいな事で上司や同僚と度々ぶつかりながら仕事をしていた。とても器用な同僚が数人いた。彼らはどんな仕事でも初めから高いレベルでこなし、周りの人達ともうまく馴染んで、新人の時期を順調に過ごしていた。決して出来る社員でなかった私は、彼、彼女らのことをとても羨んだものである。

私はその店で売場主任になり、6年間在籍した。壁にぶつかり続けながら働いている私に、手を差し伸べて助けてくれる人が何人かいた。そのひとりには新たに着任した店長で、厳しくも愛情をもって指導してくれた。また、パート従業員を中心に陰ながら私を支えてくれた人が幾人かいた。こうして、なんとか後半は業績が改善し、多少は仕事も評価されるようになってきた。小型店であったために、店長の不在時にその代行を務めることもあった。そこでは、20代では経験し難い仕事もいくつか経験した。この店から異動して15年近く経つが、当時働いていた頃の夢をその後も幾度か見ることがあった。それ以降の職業生活が決して順風満帆だったわ

けではない。なのに、今でも初任地での経験が深く心に残っているのである。

12年ほど前に三鷹店は閉店し、跡地は1階がパチンコ店、2階はカラオケボックスになった。先日、この店の前を通る機会があったが、2階のカラオケボックスは無くなり、その階段入口にはチェーンが架かっていた。2階は何かに活用されているのだろうか。気になったが、入ってみるわけにもいかず、なんとなく寂しい気持ちになった。そして、若かったあの頃の苦労は、とても貴重だったと最近になってようやく思えるようになってきた。

ここ数年、新卒者の雇用が急回復してきている。ただ、就職後3年以内の退職者は少しずつ増え続けている。退職者にとっては、たまたま初めて就いた仕事がミスマッチだったということもあるだろうし、転職するなら第二新卒として扱われる早い時期の方が良いのかも知れない。ただ、仕事がイメージと違っていたり、人間関係において多少の理不尽さを感じて、その都度、転職を繰り返していたら、一生、自分の仕事が確立できないだろう。仕事で壁にぶつかり、もがくことは、決して無駄な経験ではない。むしろそれを経てこそ、その先の道筋が拓けてくるのだと思う。壁にぶつかり、落ちこんだ若者を諭し、励ます先輩や上司が減ってきているのではないか。労働組合としても、そこに何らかの手が打てないだろうか。考え続けている今日この頃である。